

お米のはなし

お米や稲に関するちょっとした情報・豆知識を専門家が綴る「お米のはなし」No.3 をお届けします。
(シリーズ担当：R. I.)

3. 稲の日本型とインド型

先に結論から申し上げますと、稲のインド型と日本型を分ける分類基準は、現在大変曖昧になっています。例えば、日本型の草型を持つ稲に、インド型の粳を付けるような場合、これは育種上良く行われることですが、その場合、日本型なのか、インド型なのか分類に困ります。例えば、Basmati370 (インド型品種) と日本晴 (日本型品種) の交配によって育成されたサリークーンは、粒の形は細長くインド型であり、Basmati 由来の香りもありますが、草型は全く日本の稲と変わりません。

故松尾孝嶺博士 (東京大学名誉教授) は、「栽培稲に関する種生態学的研究」(1952) において、稲を粳の形で大きく3つのグループに分類しました。すなわち、A 群：日本のコメに見られる、粒の長さが中～短で、形が円いもの、B 群：形は日本のコメに似ているが、粒全体が大きいもの、C 群：粒が細長く、長粒や細粒のもの、の3つです。A 群のコメは日本のコメに見られるので、日本型(Japonica)と呼ばれます。B 群はインドネシアの品種や熱帯の陸稲品種によく見られ、Javanica と呼ばれます。またC 群は、アジア、中南米、アフリカのコメに一般的によく見られますが、インド型(Indica)と呼ばれました。最近、B 群も熱帯 Japonica と呼ばれ、Japonica に含まれるようになりました。

日本型とインド型は、分類学上の「種」の一つ下の階級、「亜種」に当たります。粒の形や大きさだけでなく、両者を交雑させると、雑種不稔と言う現象で雑種第1代 (つまりその子供) は稔実率が低下します。酷い場合には10～20%程度になることもあります。

これらを生殖的隔離と呼び、それぞれが子孫を保存するための重要な遺伝機構と思われませんが、これまでインド型稲のもつ例えば耐病性や耐虫性などを日本型の稲品種に導入する試みがなされてきました。その際には、この雑種不稔の克服が一つの障害になっていたのです。それを様々な育種手法を用いて、雑種不稔を克服してきました。一方、池橋宏博士 (元千葉大学・京都大学・日本大学教授) が提案した、インド型にも日本型にも交雑親和性を示す熱帯 Japonica の品種がもつ雑種不稔緩和遺伝子を使えば、雑種不稔を緩和でき、目的とする遺伝子の導入が容易になります。これは、ハイブリッド・ライス、特に日本型とインド型との交雑による育成では、重要な役割を果たします。

(R. I.)

次号は、「世界の稲 (その1)」を予定しています。お楽しみに。

発行：(公社)国際農林業協働協会(JAICAF)
〒107-0052 東京都港区赤坂8丁目10-39 赤坂KSAビル3階